

## 2016年度東アジア近代史学会大会シンポジウム 近年における日清戦争に対する「歴史認識」をめぐって

1995年6月17日・18日、本学会の母体となった日清戦争百年国際シンポジウム実行委員会が主催した国際シンポジウム「日清戦争と東アジア世界の変容」が開催された。この時の成果は、1997年にゆまに書房から東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容』として刊行し学界に提供してきたが、その多くは従来積み重ねられてきた研究成果を踏まえつつ、それまで用いられてこなかった膨大な史料や、新たに発見された新史料に基づく、高度で実証的な研究による純粋学問的なものであった。

この国際シンポジウムにおいては、様々な領域や分野から、わが国の他に中国・台湾・韓国・モンゴル・イギリス・ロシア・アメリカにおける代表的な日清戦争の研究者による多角的な検討がなされた。そこでは、「日清戦争と国際環境」「日清戦争と軍事戦略」「アジアの人々にとっての日清戦争」という三つのセッションを設けて検討がなされ、それを『日清戦争と東アジア世界の変容』に「日清戦争と国際関係」「東アジア世界と日清戦争」「日清戦争と戦争指導」「日清戦争の諸相」として纏めたものであった。

そこで議論されたことは、多くの研究者が長年蓄積してきた実証的研究によって導き出されたものであったことから、従来の定説を大幅に書き換えるものでもあった。さらに、そこでは東アジア世界というリージョナルな視点からのアプローチの必要性も共通の認識となっていた。

それからの20年、我々が提起してきたものを根本的に覆すような新史料の発見や研究の進展はなかった。このため、本学会でも日清戦争をメインテーマとした実証的研究を中心とするシンポジウムを企画することはしなかった。

しかし、近年、近隣諸国では「日清戦争」に対する認識に大きな変化がみられる。なかでも中国と台湾における日清戦争120周年への取り組みは、過ぎ去った一つの歴史的事件としての「日清戦争」が、現代と直接結合する過去の事件として位置付けられ、それに基づく研究がなされるという特徴を持っている。その原因は、「学問」と「政治」の距離感にかかわる変化にあった。それは、韓国においても同様のものがある。かかる研究状況の違いは、今後の日清戦争史研究にどのような影響をもたらすであろうか。

このような事情を踏まえ、本シンポジウムでは近隣三ヶ国とわが国における研究動向を把握し、それを踏まえて今後の研究課題を探るため、先ず韓国における日清戦争研究の特徴を踏まえながら、原田環氏（県立広島大学名誉教授）に1880年代から1945年までの研究動向を、木村幹氏（神戸大学教授）に戦後の研究動向について述べていただく。次いで、川島真氏（東京大学教授）に2015年に行われた中国における甲午戦争120周年史研究の背景について、若松大祐氏（常葉大学准教授）に台湾における甲午戦争史研究の現状を、さらに大谷正氏（専修大学教授）に日清戦争国際シンポジウムから20年間のわが国における日清戦争史研究の現状について述べてもらう。

以上の報告を基に、今後の日清戦争史研究の課題について検討していきたい。